

第11回ボルダーユース日本選手権倉吉大会 (BYC2025) 開催報告



「第11回ボルダーユース日本選手権倉吉大会 (BYC2025)」が鳥取県倉吉市の鳥取県立倉吉体育文化会館で開催された。本大会は2015年に同地で初開催されて以来、全11回のうち9回がこの会場で実施されており、ユース選手のボルダー種目の「聖地」に2年ぶりに帰ってくることとなった。

ボルダー種目はワールドカップでも日本代表チームが世界ランキング1位を10年守り続けている(本大会開催時点)種目であり、日本の選手層の厚さは他国を圧倒している。本大会は今後も引き続き日本が世界を牽引し続けることができるかを占う重要な大会であり、日本全国から有望なユースクライマーが集まり凌ぎを削る、見応えのある大会となることが期待された。

■開催概要

第11回ボルダーユース日本選手権倉吉大会 (BYC2025)

期　　日　　2025年5月31日(土)～6月1日(日)

参加選手数　239名
(U-19男子: 58名、U19女子: 40名、
U17男子: 78名、U17女子: 63名)

会　　場　　鳥取県立倉吉体育文化会館

来場者数　予選約720名、決勝約410名

※選手、スタッフ、メディア、VIPなど含む

■競技 BYC2025 競技結果

男子

順位	氏名	所属	成績(決勝)
U-19			
1	佐々木玲偉	福島県山岳・スポーツクライミング連盟	59.7
2	山田 航大	埼玉県山岳・スポーツクライミング協会	59.4
3	長森 晴	N高等学校	44.8
U-17			
1	小山 楚嵐	三重県山岳・スポーツクライミング連盟	58.9
2	濱田 瑞誠	神奈川県山岳連盟	44.6
3	小西 充晃	熊本県山岳・スポーツクライミング連盟	44.6

女子

順位	氏名	所属	成績(決勝)
U-19			
1	村越 佳歩	茨城県山岳連盟	74.5
2	山 真奈実	三重県山岳・スポーツクライミング連盟	59.6
3	山根 嘉穂	茨城県山岳連盟	59.5
U-17			
1	齋藤紗里衣	栃木県山岳・スポーツクライミング連盟	44.5
2	松浦 朱希	東京都山岳連盟	43.9
3	中村まりん	茨城県山岳連盟	34.9

本大会では国際スポーツクライミング連盟(IFSC)によるルール変更に伴い、いくつかのルール変更がおこなわれた。



1 : 年齢別カテゴリー編成の変更

2 : 成績のポイント制の導入

3 : 決勝進出者数及び競技進行の変更

いずれもボルダージャパンカップや他のユース選手権でも実施されているため詳細は割愛するが、ボルダーユース日本選手権では男女同時での決勝となるため、最大4選手が同時に競技することとなる。このため、各課題への注目が分散し、進行が散漫になる懸念もあったが、一方でスピーディーな展開によって会場の熱気が持続し、盛り上がりが途切れないという効果も見られた。今大会においては、むしろその「良い面」が際立っていたという印象を受けた。

【U17】

女子は2課題まで完登が出ない緊迫した雰囲気で競技が進み、最後まで僅差のまま第3課題を迎えた。最終課題はTOPへのシークエンスが読みにくい課題で、対応力の差が勝敗を分け、予選を7位で通過した齋藤紗里衣が、予選首位通過の松浦朱希を僅差で抑え初優勝を決めた。

男子は1課題で4人が完登するものの、この世代では昨年世界ユース選手権で金メダルを獲得した濱田瑞誠が完登を逃す予想外の展開で幕をあけた。完登が出なかった2課題を終え、最終課題は競技壁を大きく使った横方向へのコーディネーション課題。多くの選手が苦戦する中、小山楚嵐が完登すると場内は大歓声に包まれ、自身初の表彰台を優勝で飾った。その後、濱田も完登を決め2位をもぎ取る結果となった。

【U19】

女子は2課題を終え、予選を2位タイで通過した、村越佳歩、山真奈実、山根嘉穂の3選手が両課題を完登し最終課題での争いとなった。最初にトライした村越が完登を決め残りの2選手のトライ次第という展開となったが、両者ともに僅かなところで完登を逃し、唯一の全完登で村越が2年ぶりの優勝となった。

男子も2課題終了時点で6人が僅差で並ぶ展開。最終課題は強傾斜でフィジカルが求められる課題であったが、佐々木玲偉、山田航大、長森晴の3選手が



完登し、トータルのトライ数の差で0.3ptリードした佐々木がリードユース日本選手権で4位だった雪辱を果たし、初優勝を決めた。

■総評

大会は、鳥取県山岳・スポーツクライミング協会が主管のもと開催された。同県では前述の通り、ボルダーユース日本選手権を長く開催してきた実績があり、今回もスムーズかつ安定した大会運営を実現することができた。改めて尽力くださった競技役員の皆様に感謝いたします。

また、リードユース日本選手権同様に近年のユース選手権では見送られていた、予選のYouTubeライブ配信を実験的に実施した。遠隔操作で画角などを調整できる中継カメラを会場に配置することで、競技の進行や演出をしながら最小人員での中継を実現できた。現時点での予選の再生回数は決勝のそれを超えており、ユース大会での予選中継のニーズを再確認することができた。最後に、本大会の開催にあたり尽力をいただいた、全ての関係者の皆様にお礼申し上げます。

副実行委員長 藤枝 隆介



写真 PHOTO : Ryo Kubota/JMSCA/アプロ

第61回海外登山技術研究会2025埼玉県開催&令和7年度全国国際委員ミーティング報告

「ダサイですよー」とある若者から研究会の名称について言われた事がある。まあ61回も続く研究会だから昔風なんですよね。今風に変えた方が良いのかなー?

それはさて置き研究会の前日に全国国際委員ミーティングが行われました。

全国国際委員ミーティング

日時 6月14日(土) 17:30 ~ 19:30

会場 埼玉県さいたま市大宮区ソニックスティ 501会議室

最初にJMSCA 登山部・野村善弥部長より挨拶をいただく。報告は加藤富之常任委員より令和6年度の事業及び決算報告と令和7年度の事業計画及び予算案があった。続いて各都道府県委員長から活動紹介と情報等交換をしました。参加したのは地元埼玉県、群馬県、長野県、愛知県、京都府、山口県、福井県、千葉県で例年より若干少なめなもの合計20名の参加者だった。

個人的に印象が残った話としては福井県の渋谷好司委員長より福井県山岳連盟所属の山岳会会員1名がガイド登山でネパール・アマダラム峰に登頂したがクラウドファンディングを利用した事と2023年第59回同研究会(福井県開催)参加の若者が刺激を受けて海外登山を実践するようになった。これには研究会が少しでも海外登山者を増やす事に貢献をしているのだと感じた。



第61回海外登山技術研究会 2025

日時 6月15(日) 9:20 ~ 16:45

会場 埼玉県さいたま市大宮区ソニックスティ 906会議室

最初にJMSCA 小野寺斉専務理事から歴史ある「海外登山技術研究会」への期待と励ましの言葉が送られた。

■ 現地でかかるレスキュー費用と保険金額の現状

「天国じじい」としてテレビでお馴染みの貫田宗男(ぬきた むねお)講師は世界中の山や辺境地撮影をコーディネイトし飛び回っている故、現地でのレスキュー状況や保険についても詳しい。今回も南米ペルー・アルパマヨ峰に出かけており地球の裏側からのオンライン報告となった。

海外登山保険は欧米に較べると日本は非常に遅れている。儲からないからやらないという事もあるが、確かに

膨大な請求をされるケースが多い。特に登山者、トレッカーコーに多いネパールは比例して事故も多い。同国はヘリコプター救助が多用されていて、性能以上に高高度までフライトをする。プロの操縦士もいて、さらに高額の請求が待っている。また詐欺まがいや本当の保険詐欺事件も起きている。

以下共済や保険などの紹介

○日山協山岳共済 ○労山基金(山岳共済)

○Global Rescue ○生命保険(ゆうちょ含)など。

とにかくお金が沢山かかります。事故は起こさず気を付けてお出かけ下さい!との事。

■ パキスタン/カランバル渓谷でのクライミング

〈ボフパリット登山報告〉メンバー 2名 + α

鳴海玄希(なるみ げんき)講師は先鋭的でユニークな登山やスキーで知られているクライマーだが、今回程ユニークな登山はかなり珍しい。常識的山登りはアプローチ、登山本番共に良く調べ計画をきちんと立て、装備も万全に…とは真逆であり資料は友人(国際・AC委員長の岩崎氏だが)の撮影した20年前の写真数枚の上、アフガニスタン国境近くで外国人登山者は数十年に1度程度で情報はほとんど無しという行き当たりばったりだったからだ。

案の定渓谷目前で「外国人立入禁止」の看板で振り出しに戻る。それも何とかクリアし素晴らしい岩稜の登攀に入ったが3日目に降雪・夏山装備で4日目も会心のクライミングをするもボロボロの岩の地帯に突入し、危険過ぎると敗退を判断。しかし楽に思われた北壁の懸垂下降はスノーシャワーの中18ピッチもある厳しいものだった。敗退したとは言え二人とも満足の山旅だったと言う。

尚写真家の鈴木岳美氏が美しく、素晴らしいドローンでの撮影をしており、見たことのない登攀シーンなどなどあるので機会があればぜひ見て欲しい。

■ アラスカ/デナリ (6190m) カシンリッジ

〈The Linked Cassin 登攀報告〉メンバー 3名

今回の竹田昂(たけだ すばる)講師はじめメンバー全員が信州大学・北海道大学卒業の20代。そんなフレッシュな若者達が入山前に窮地に陥った!アラスカ入りして直ぐに装備のほとんどを盗難されてしまったのだ。普通ならそこでThe Endなところだが、ニュースになり地元やカナダのクライマー達が上から下まで装備を提供してくれたのである。

さて表題にはカシンリッジと有るもの今回のル